



復興まちづくりの事例紹介

益邑と申します。

私は東日本大震災の復興まちづくりに関わり、その経験を基に能登半島地震の被災地支援に取り組んでいます。災害前の準備は非常に重要で、行政は施設整備や避難呼びかけ、住民はハザードマップの確認や避難訓練などを行います。一方で、被災後の準備も必要で、避難生活の備えや事前都市復興の計画が重要です。

岩手県大槌町赤浜地区の事例では、住民が被災後の復興計画案を自主的に作成しました。津波の被害で1000人住む集落で93人が亡くなりました。住民は仮設住宅の場所を自主的に確保し、地域復興協議会を通じて自治体に復興案を提案しました。住民の意見を基にした復興計画が自治体の公式計画に反映されました。

このように、被災後は個々の生活再建が精一杯ですが、地域全体で意見をまとめ行政に伝える必要があります。そのための組織づくりや話し合いの場の準備は時間がかかるため、平時からの準備が重要です。赤浜地区では自主的な防災活動が復興計画づくりに繋がりました。

もう一つの事例は能登半島地震の被災地である七尾市の一本杉通りです。歴史的建物が並ぶ商店街で、復興マルシェを開催し、地域の再建を進めています。復興方針作りでは地域の価値や課題を確認し、住民が主体的に地域の復興方針を作成しました。行政やボランティアとの協力も明確にし、地域の魅力を引き出す復興まちづくりを目指しています。

事前に地域の魅力や大事なものを考えておくことは、時間だけを優先した画一的な復興を避けるために重要です。一本杉通りでは事前に地域の魅力を記した冊子があり、それが被災後の復興方針作りに役立ちました。

復興まちづくりは計画通りには進みませんが、地域のビジョンや方針を掲げることで進むべき方向が見えてきます。地域の魅力を再確認し、未来への方向性を探ることが重要です。今回の取り組みを通じて、地域の魅力を活かした復興を進めています。

以上が私の説明です。

